

鳥祐
越田
文善
蔵雄
編

上方狂言本

四

古典文庫

鳥祐
越田
文善
蔵雄
編

上方狂言本

四

古
典
文
庫

古典文庫第二四六冊

昭和四十三年一月十五日印刷発行

(非売品)

編者

祐田善雄
鳥越文蔵

本言

吉田幸一
發行者

上方
四

東京都板橋区熊野町三四

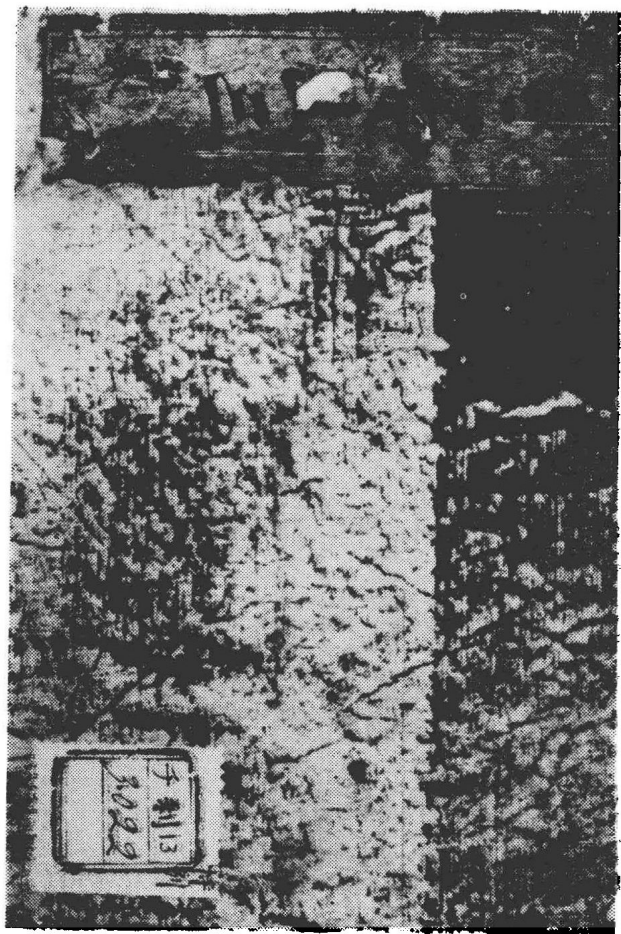
印刷者 帝都印刷製本株式会社

發行所

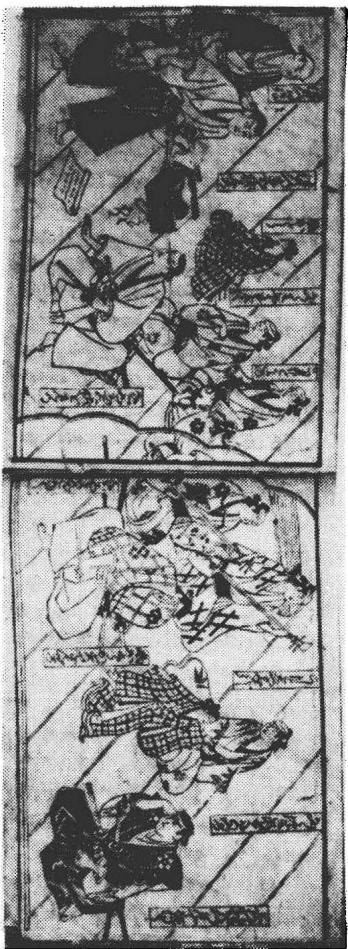
東京都(王子局区内)
北区西ヶ原三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番



2 なごや山三 表紙・題字

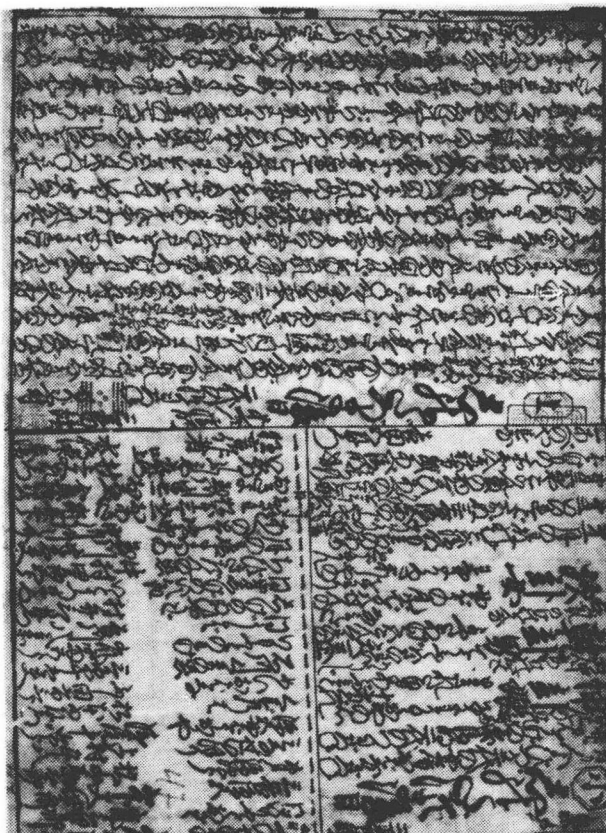


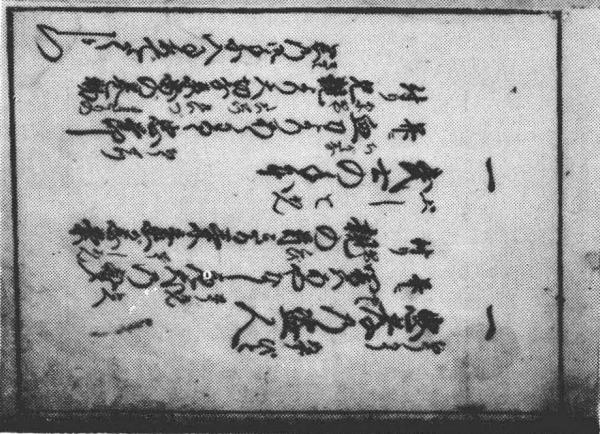
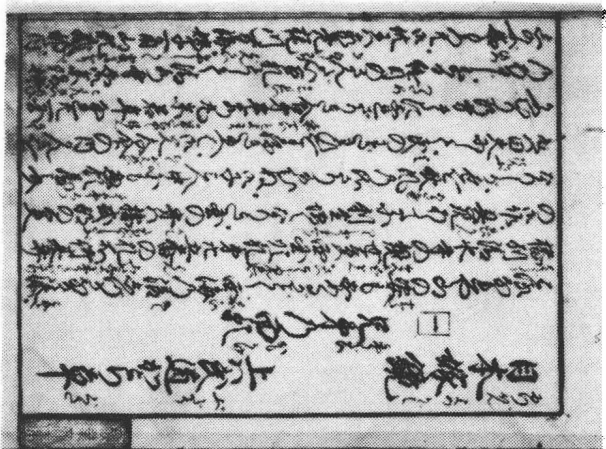
3 なごや山三 挿画第十一図(右)・第十二図(本文159頁参照)

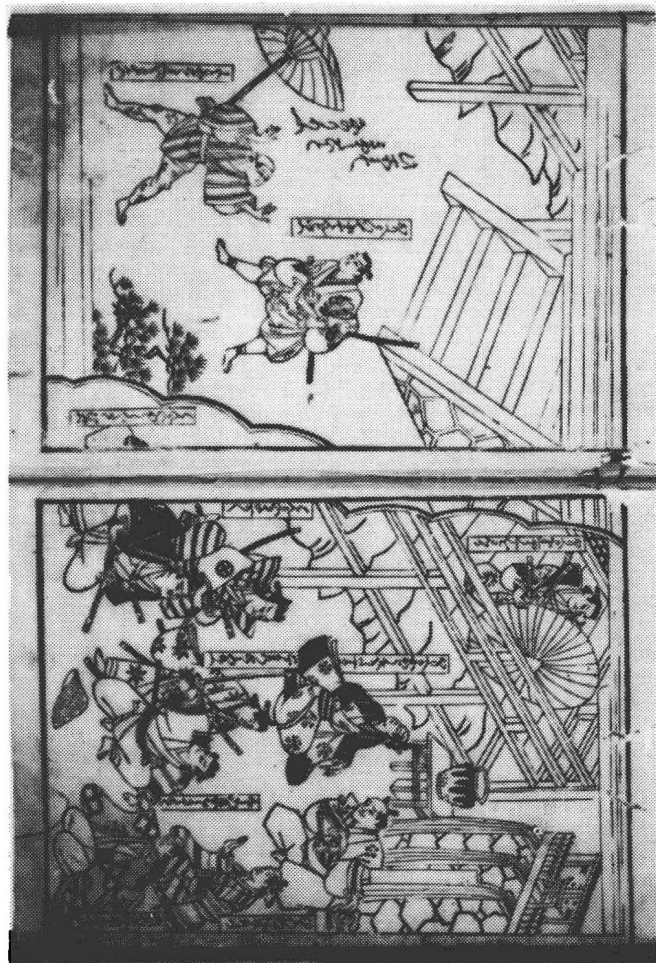
[A page from a manuscript featuring approximately 18 lines of handwritten text in a cursive script, likely Indic or Persian. The text is written in dark ink on aged paper. At the bottom right, there is a small rectangular stamp containing the number '97'. Below the main body of text, there are two distinct markings: a vertical bar followed by three horizontal bars, and a large, stylized signature or flourish.]

1









目次

凡例	二
解説	三
本文	
一、けいせい仏の原	二三
二、なごや山三	八三
三、しのだつま	一七九
四、しのだづま後日	二三九
五、日本嫁鏡	二六九

凡 例

一、『上方狂言本』の第四冊目として、早稲田大学図書館蔵の「けいせい仏の原」「なごや山三」、同演劇博物館蔵の「しのだつま」「しのだづま後日」「日本嫁鏡」の五篇を収めた。

一、翻刻は第一冊目の基準に拠ったが、句読点のみ基準を変えた。すなわち、底本の・。はそのまま残し、ゝは・に統一した。それ以外に通読の便を図って、任意に加点了場合には一字分を空白にした。

一、解説は書誌的なことに重点をおき、その他は出来るだけ簡単にした。

一、本文、解説ともに草稿を鳥越がつくり、その校合、添削に祐田が当った。

一、本書の刊行に当って、原本の披見と翻刻を許可された早稲田大学図書館、同演劇博物館に感謝の意を表する。

祐 田 善 雄
鳥 越 文 蔵

解 説

けいせい仏の原

早稲田大学図書館蔵

書誌 後人の筆写本による大本一冊、上のみ。

〔体裁〕 袋綴。

〔表紙〕 朽葉色無地（原本とは無関係のように思われる）。

〔匡郭〕 四周单边。縦二〇・三糎×横一五・〇糎。

〔丁数〕 十七丁三十四頁。

〔行数〕 十二行。

〔字数〕 一行に約四十三字〜五十字。

〔柱刻〕 「けいせい 丁数」。ただし柱刻と丁数は三・四のみで、それ以下には記入がないから、通しの丁数を洋数字で書き入れた。

〔挿絵〕 なし。ただし四ウ5オ、9ウ10オ、16ウ17オの見開き三面六頁が白紙。

〔題簽〕 左肩に後人の墨書「けいせい仏の原 全」

〔内題〕 上「けいせい仏の原 三国のあふしうはね引の松太夫の名どり」

〔刊記〕 なし。

〔板元〕 不明。

〔印記〕 「早稲田大学図書」と「明治四拾年四月十七日購求」のみ。

元禄十二年正月 京都万太夫座初演。近松門左衛門作のこの狂言については、並本（正本屋九兵衛板）や当期の評判記類でよく知られている。上本の伝存は明らかでないが、この本は当期の上本の筆写本とみてよい。ただ、匡郭の寸法が狂言本の匡郭としてはやや大きいように考えられるので、透き写しではないかもしれない。

元禄十年代の上本を調査すると、すべて「上」と「中・下」の二冊よりなり、「上」は本文に見開き三面の挿絵を含む。挿絵の上部に出演俳優の短評を記したものもあるが（十年『面向不背玉』、十一年『けいせい浅間嶽』等）、中には絵のみのものもあって（十五年『傾城壬生大念仏』、同『日本嫁鏡』等）、必ずしもそれが必要条

件というのではない。よつて、この筆写本の見開き三面の白紙は挿絵の部分とみられるから、上本の体裁を逸脱してはいないと考える。

この書については、昭和三十四年、「けいせい仏の原考」（『演劇学』一号）で並本と比較して紹介したが、「しげき思ひは」の小歌、文蔵の身の上話、「いつの間にかは」の嫉妬の歌などが本文中に書き込まれていたりして、並本で省略されたことがこの本で知られる点も多い。「いつの間にかは」の小歌は、並本では表紙みかえしの上段に「けいせいおうしつとのうた」として記されているが、同じ小歌が『落葉集』（元禄十七年三月刊）巻二の十九に「傾城仏の原 岩井左源太 上村吉三郎」の見出しで収められている。並本の役人替名によれば「身請のけいせいおうしういわい左源太、立花かすへ娘竹姫上村吉三郎」なので、この時のものに一致する。

この時の評を『役者口三味線』（元禄十三年三月刊）の坂田藤十郎の条より一部記しておく。

殊ニ当二のかはり・けいせい仏の原・尤しぐみ出来物にて・よく役くばり相応して・立チものゝ衆中・何れもあつたではござれ共・一つは此人近年にな

き、情の出しやう。所作の外に、手水鉢に身をへんげ、あるははふより、やねにつたひて天上し、又はこたつの姿とあらわれ、身心共にまるとゆへ、一チばいでけたやうにみゆる事、此人のはたらきにあり、つと／＼に申せば、鷹がりのかへるさ、馬の上から訴訟人へのあいさつ、いかにも大名の惣領めいて、世知なる目には、すこしぬけたるやうに見へ侍る所が、成程惣領の大やうにそたちたるてい、自然とうつり申す、扱かんどをうけて、紙子一くはんのていと成くだりては、其時のかいぎやうにうつり、おうしうにあふて、三国にてはいせいかふたる一チまき、皆かげにして、此人のいひほどき一しゆにて、末／＼／＼入くみたる事共迄、見物よくのみこむやうに、云仰らるゝ事、第二下手がいにては、あんばいようは参るまいやうに存る、云々

なごや山三

早稲田大学図書館蔵

書誌 横本一冊。上之巻のみ。作者未詳。

〔体裁〕 袋綴。